

2018（平成 30）年 3 月 1 日

博士学位申請論文審査報告書

◆論文題目

「中国の計画生育についての研究—“80 後”世代の婚姻問題を中心として」

◆学位申請者： 鄭 鷗鳴氏 (ZHENG Ouming)

◆指導教授： 韓 景旭 教授

1. 審査の経緯

2017 年 10 月 18 日に新谷秀明大学院国際文化研究科長より片山隆裕に、鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文の主査依頼があり、副査の韓景旭教授（指導教授）、金縄初美教授とともに 3 名で審査委員会を構成することとなった。審査委員会の委員 3 名は、鄭鷗鳴氏から提出された事前審査論文を精読し、内容・形式面における詳細な示唆を行い、必要に応じて論文に加筆・修正を加えるよう指示した。審査委員の指摘を受けて加筆・修正された論文について、2017 年 12 月 20 日に審査委員 3 名で協議した結果、審査委員会の指摘を反映して適切に加筆・修正がなされていたことから、鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文の最終審査を 2018 年 1 月 31 日に実施することを決定し、鄭鷗鳴氏に最終審査に臨むよう指示を行った。同年 1 月 31 日、新谷秀明大学院国際文化研究科長、審査委員 3 名（主査片山隆裕、副査韓景旭、副査金縄初美）ほか立ち合いのもと、鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文の公開審査を行った結果、審査委員会として鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文が十分に評価に値するという結論を導き出し、その結果を本日（2018 年 2 月 24 日）の国際文化研究科委員会に諮ることを決定した。

2. 論文の内容

（1）論文の概要

鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文は、現代中国の人口政策の変遷、特に 1979 年から現在に至るまでの中国における「計画生育政策」（通称、一人っ子政策）について取り上げ、その政策が実施された結果、1980 年代（以降）に生まれた中国人の婚姻問題と人口問題について多角的な考察を行ったものである。主として、「80 後」（バーリンハウ）という 1980 年～1989 年に生まれ、2017 年時点で 28 歳～37 歳の世代に焦点を当て、その婚姻問題を中心として関連して生じる様々な社会問題について、多様なデータ収集の方法を用いて論じた力作である。

（2）研究方法

鄭鷗鳴氏は、2011 年 7 月から 2017 年 6 月までの 6 年間にわたって、中国国内にお

いて2度のアンケート調査と9度の現地調査を実施している。具体的には、中国の都市部と農村部の経済発展が進んでいる地域と相対的に遅れている地域の3カ所において現地調査を行うとともに、鄭氏自身が「80後」世代でもあるので、自身のクラスメート63人を対象に、全員の最終学歴および婚姻状況についてインタビューを行い、そのデータをもとに統計資料を作成している。鄭鷗鳴氏は、最も一般的な「80後」の生活状況を把握するために中国中部の河南省洛陽市を選ぶとともに、「計画生育政策」の実施状況をより詳細に把握するために、河南省、山東省、甘肅省、北京市などの地域で現地調査を実施するとともに、広西チワン族自治区とベトナム北部のモンカイ市からハロン市間の地域におけるベトナムから密入国した外国人花嫁の問題についても貴重な調査を実施し、「80後」の婚姻問題や人口問題を多角的な立場から論じるに十分なデータの収集を行った。

(3) 論文の構成

鄭鷗鳴氏の論文は、序章、6つの章からなる本論、および、終章から構成されている。序章で上述した研究の目的と方法、および調査の経緯について述べた後、第1章では、人類の歴史において、人口の変化が社会の発展にどのような影響を及ぼしてきたかを概観し、人類史全体から見た人口問題研究の意義を語る。第2章では、新中国成立後の1950年から「計画生育政策」が実施される直前の1979年までの、中国における人口政策及び人口増加の状況についての分析を行っている。このことによって、次章以降で論じられる「計画生育政策」およびその結果生み出された「80後」世代のもつ特性がより理解できるようになっている。第3章では、まず、「80後」の概念についての説明を行い、1976年の文化大革命終結後の1978年に「改革開放政策」が発表され、翌1979年に発表された「計画生育政策」の結果として生じた「80後」世代の婚姻状況、経済発展による地域差などについて分析している。この章では「計画生育政策」の概要、および、当該政策の経済発展との関係、政策実施の影響の地域による変異などについて、マクロな視点からの把握が可能となっている。第4章では、「80後」の婚姻に関する意識の変化によって生じた諸問題についての分析を行っている。晩婚・晩産やディンクス族、伝統社会における婚姻と家庭に関する価値観などにも注目し、社会の安定と伝統的な人間関係の維持のために必要な家庭の役割が弱体化していることを指摘するとともに、「剩男・剩女」という新たに生まれた社会現象にも注目する。第5章では、「80後」の婚姻についての最新状況と変化、中でも、未婚現象と離婚問題について詳細な報告を行うとともに、「空巢老人」「留守児童」の増加という世代別人口バランスの歪みについても考察を行っている。第6章では、「計画生育政策」の影響によって、「80後」の出生率が著しく低下し、伝統的な「男尊女卑」の思想とともに、男女の「産み分け」や性別選択のための「人工妊娠中絶」が増加していること、それに伴って、男女の人口比率に不均衡が生じていることなどを指摘する。すなわち、人口政策が中国の人口構造に与える影響について検討し、嫁不足の問題との関連から、人身売買と密入国問題についての考察を行い、そうした状況が中国社会に及ぼす影響について述べている。中国の「計画生育政策」は中国の伝統的な家族構造や

人々の価値観と整合しない部分が大きく、そのことによって生み出された問題が、中国国内の問題にとどまらず、グローバルなかたちで周辺諸国・地域との関係にまで影響を及ぼしていることを指摘している。

終章では、以上の論を簡潔にまとめ、①今回調査できなかった地域や諸民族における調査の実施、②2016年より実施されるようになった新たな人口政策（二児政策）の研究、を今後の課題として締めくくっている。

3. 論文の評価と課題

鄭鷗鳴氏の博士学位申請論文は、「計画生育政策」や政策がもたらした多様な結果を論じるだけでなく、その結果生み出された「80後」の婚姻状況の分析を通して、人口政策の実施プロセスにおける人権侵害、農村地域における留守家庭の問題、老人扶養の問題、出稼ぎによって起きる家庭問題など、現代中国における様々な社会問題を多角的に分析できており高く評価できる。調査方法もアンケート調査、聞き取り調査、参与観察など多岐にわたり、調査自体も中国国内および中国・ベトナム国境地域に及ぶ都合 8000 km に及ぶ広範囲を移動して意欲的に実施されており、都市部、発展した農村部、発展に取り残された農村部と調査対象地域を明確にして、その間にある変異を導き出すなど、一定程度ではあるが広大な中国における「計画生育政策」がもたらした結果の多様性についても十分な認識がなされている。そのため鄭鷗鳴氏の論文は、中国における人口問題と人口政策をめぐる研究に貴重な貢献をするだけでなく、少子高齢化が進行する我が国をはじめとする多くの社会の人口問題研究に対しても一石を投じるものと確信している。鄭鷗鳴氏は、今後、「計画生育政策」が 2016 年に終了した後の、「二児政策」によって起きるであろう、中国における新たな状況の変化について研究を行おうとしているが、さらに少数民族に対する人口政策とその影響に関する民族誌的調査を実施することも含めて、さらなる研究の進展が期待できる。

以上のことから、鄭鷗鳴氏より提出された博士学位申請論文は、十分に博士の学位を授与するに値するものとして、大学院国際文化研究科委員会に諮るものである。

鄭鷗鳴氏博士学位申請論文審査委員会

主 査： 片山 隆裕

副 査： 韓 景旭（指導教授）

副 査： 金繩 初美